

## 本邦ケインズ学の貧困

——『ケインズ 100の名言』の迷言の起点となった『雇用・利子および貨幣の一般理論』の誤訳

(下)

米 倉 茂

はじめに

I 「はじめに」から捏造されたケインズ像―ケインズと比較する相手の取り違え

II 改竄された英国の再建金本位制の成立・崩壊の過程

III とんだ『雇用・利子および貨幣の一般理論』解題

(i) 『一般理論』における名言を台無しにする切斷行為

(ii) 「壺」をはずした「アニマル・スピリッツ」の惨状―「美人投票」の顛末

(iii) 「流動性のわな」にはまった「流動性選好」

VI とんだマルクス・レーニン評言

(i) ケインズに名を借りた「レーニン主義」の転倒

(ii) ケインズに名を借りた『資本論』によるコラーン抹殺

V 忘却の彼方と化したケインズの戦後通貨構想

(i) 「流動性のわな」ならぬマウス・トラップにはまった悲劇

(ii)	銀行原理も理解できないまま清算同盟案を解題	
(iii)	かき消されてしまったケインズ・ロバートソン論争の佳境	
VI	猛威をふるうケインズ・ハザード—玄人投資家ケインズの手口を理解できない「投機家」の登場	
VII	一〇〇番目の「名言」を飾るに相応しい「終焉」	
	—迷言に始まり迷言に終わった『ケインズ 100の名言』	
		以右が(上)
VIII	ケインズの深層心理を読み切っていた反ケインズ学者—西部邁に残された課題	73
IX	誤訳で塗り固められた『一般理論』第12章 長期期待の状態	79
(i)	利子率による「予想収益の資本化」の「予想収益」の不明さ	79
(ii)	第四節の誤訳の露天掘り	90
(iii)	台無しにされた美人投票方式の投資	93
(iv)	「信用の状態」を理解できない信用論・景気循環論	97
(v)	「企業」を死に迫いやる投資論—またまたキャピタルゲインへの無理解	99
(vi)	英米の証券市場比較がサッパリできない比較論	101
	むすび	116
	付録 京都大学経済学博士号審査の実態調査報告	117
	京都大学における経済学博士誕生の顛末	117
	参考文献	121

## VIII ケインズの深層心理を読み切っていた反ケインズ学者―西部邁に残された課題

以右のとおり、暗澹たる状況に陥っているのが日本のケインズ学者である。しかしこの闇の中にも一筋の光明が見出されることを忘れてはいけない。それは西部邁の『ケインズ』である（復刻版、イプシロン出版企画、二〇〇五年）。周知のとおり、西部の言動は話題に事欠かない。彼はケインズ学者ではない。むしろ、反ケインズを標榜している。にもかかわらず、西部版『ケインズ』に展開されるケインズ人物像の描き方は凡庸なケインズ学者を凌駕している。著者の場合、賛否を超えた次元のこともあるが、西部の洞察力に脱帽することが多い。

拙著、『落日の肖像―ケインズ』は、ケインズの性格描写において西部の認識とつうじる点がある。たとえば、西部の次の指摘である。

つねに時代を中心に姿を現したにもかかわらず、彼はマージナル・マンつまり境界人であった。理論と実践、学問と芸術、世俗と超越、道徳と背徳、その他あれこれの境界上を彼は足早に駆けぬけていった（西部）一五頁

実に鋭い的確な描写である。ブレトンウッズ協議、英米金融協議というめまぐるしい展開の中、ケインズは開放主義、閉鎖主義の両極を「足早に駆け抜けていった」のである。さらに、続く西部のケインズ像の捉え方も至言そのものである。

それは悪くいえばカメレオンの所業であり、良くいえばカレイドスコープの現象であった（西部）一五〇六頁

この場合、筆者は「カメレオン」の方に重点をおいてケインズを解説してきた。だからこそ、西部の次の性格描写も拙著の主張とぴたりと一致する。

ケインズの肖像はいわば引裂かれている（『西部』二〇頁）

筆者は西部とは別の視点からであるが、「引裂かれた」ところの「ケインズの肖像」を描き出してきた。ステロタイプ化している日本におけるケインズ像への異議申立てである。

これは逆説的ながら、ケインズの学問姿勢を踏襲したものである。この点に関し、西部の解題はまたまた絶品である。

『前提を問い直す』というケインズの基本姿勢は、必ずや、既存の先入見を理解あるいは解釈の俎上にのせるものである。つまり、事実なるものを成立たせている人々の象徴的な意味体系を解釈し直すものである。そしてその作業のなかには、経済学者たちの抱く先入見にみちた科学的な意味体系にかんする解釈も含まれるのである。それゆえ人々が、そして経済学者たちが、第一に『啓発』さるべきなのは自分たちの先入見の意味内容についてである（『西部』九四頁）

この西部を引用する場合、筆者はもちろん、日本のケインズ学者を念頭においている。ケインズという恩師の心知らず弟子といったところであろう。彼らの多くは、「経済学者たちが、第一に『啓発』さるべきなのは自分たちの先入見」（『西部』九四頁）であることへの自省に乏しい。

だからこそ、ケインズが『一般理論』の巻末に発した有名な警句が活かされなくてはならない。「遅かれ早かれ、良くも悪くも危険なのは権益でなくて観念なのである」（JMK7, p.384）。人々の心に隅々にまでまん延している古

い考えから脱却することがいかに大変なことであるかというわけである。一方、新しい考え自体には厄介なことはないという。

こうしてみると西部によるケインズの深層心理分析は見事であると言うしかない。脈絡はまったく異なるが、次の西部のケインズ評も「引裂かれた」ところの「ケインズの肖像」を伝えるのに十分な説得力がある。

ケインズの全貌を見渡すなら、彼はすでに経済学の壁を通り抜けていたのだともいえる。いまケインズについて論じようとする場合、もし壁のこちら側のケインズについてならば、それはケインズに対する葬送曲とならざるを得ないであろうが、壁のむこう側のケインズについてならば、行進曲の調子もたぬでもないのである（西部）一九五頁）。

ケインズの人となり語るには「葬送曲」も「行進曲」のいずれも奏でなくてはならない。銘記すべきはケインズは人々が「葬送曲」に深沈している時にも「行進曲」で「足早に駆け抜けていった」ことだろう。終世、樂觀主義が基調だったのである。諧謔に満ちた「言論行為」の巨人は世界情勢分析もスケルツァンドで奏でていた。筆者も西部と共に、「行進曲」、「葬送曲」を同時に奏でつつ、ケインズを描いてきたのである（米倉二〇〇六）。

以右、その一端にすぎないが、西部の描くケインズ像を明らかにしてみた。ケインズを追ってきた筆者も思わず相づちを打ってしまう、的を射ている記述が多い。しかし、留保すべき点も指摘しなければならない。

はたして西部は「ケインズの全貌を見渡す」手続きをしたのであろうか。もちろん、ケインズの「全貌」を一番知っているのはケインズ本人である。ここで筆者が問題としているのは、ケインズの人生のクライマックスにふさわしい戦後通貨構想の構築という経緯が、西部のいわゆる、「ケインズの全貌」の範疇に属するか否かである。残念ながら否といわざるを得ない。

しかし西部の天才ぶりがここでもいかになく読み取れる。すなわち、西部は「ケインズの全貌」の結節点となるはずの時期を語らずとも、ケインズの性格を正確に描ききっていたことである。これも多くの日本のケインズ学者（訓詁学者）とは大きく異なるところである。

西部の主張の本来の意図と異なるところであるが、ケインズの戦後通貨構想の内実、帰結を知らない日本のケインズ学者を見事に形容する警句を西部は残している。

われわれは毫もケインジアンではない。まったくの超<sup>トランス</sup>ケインジアンなのだ（西部）一九六〇七頁）。

この場合、もちろん、「超」は両義的なものでなく、片務的なものである。

先に紹介したとおり、ケインズは『一般理論』の巻末でも有名な記述を残している。まさしく、後生のケインズ学者を念頭においていると解釈してよいであろう。日本のケインズ学者はケインズ全集も読むことなくケインズの人となり語っていたことへの警句となろう。これをもう一度繰り返して引いておく。

遅かれ早かれ、良くも悪くも危険なのは既得権益でなく観念なのである

今回、取りあげてきた平井のケインズの似非解説本に示されるとおり、日本のケインズ学者の多くが「既得権益」にすぎり、旧来の「観念」にはまっていた。まさに、二重の意味で「危険」なのである。

なお、惜しむらくは、西部の場合、ケインズとロバートソン論争に関してはまったくふれていない。あるいは、それに関連して戦後通貨構想を語らない。英国の主権が維持できるか否かの重大問題においてケインズがいかに振る舞ったのか、言及しない。付録の年譜においても、一九四三年のブレトンウッズ会議のための予備会議でホワイと激しくやりあつてケインズ案がホワイト案に敗れると記しているだけである。一九四四年のブレトンウッズ会

議が年譜に出ていても、一九四五年の英米金融協定に関しては年譜にも紹介がない。かくて、西部は「ケインズの全貌」におけるクライマックスの局面を確認もせずにケインズの人格の全貌を語ったことになる。

しかしこれは必ずしも西部だけの責任ではない。英米金融交渉を一九四四年から一九四五年を通して描写することはハロッドの『ケインズ伝』にはなかった。軽くふれているだけである。その意図はどこにあるか、筆者はいろいろと推量してみた（『落日の肖像』第6章）。したがって、ハロッドの域を出ないまま、あるいはモグリッジ、スキデルスキの大部のケインズ伝を読むこともない、日本のケインズ学者がケインズの深層心理を活写できないのも当然である。その時期のことを西部が論評できないのも、当時の日本の研究水準という時代的制約が大きく災いしたからである。

とはいえ、西部にも文献渉猟の面で問題が残る。西部の著作が出た一九八三年はケインズ生誕一〇〇周年であり、世界的に見れば、すでに一九八〇年には戦後通貨構想に関する資料を満載しているケインズ全集も出ていた。結局、西部はそれらを参照することなく、ケインズを語ってしまった。となると、次の西部の修辭も割り引いて読み込まなくてはならない。

心理の葛藤劇を、ケインズは歴史の大舞台の上で演じた（〈西部〉一五頁）

この「心理の葛藤劇」に一番ふさわしい大舞台が一九四四年夏以降の対ロバートソン論争における完敗であり、あるいは一九四五年英米金融交渉におけるケインズの右往左往の事態であったはずである。ケインズの人生における最大のクライマックスであり、栄光と転落を描き出すのに格好の時期であった。西部はケインズ劇場のチケットをシリーズで買い、「歴史の大舞台」のフィナーレを観覧しておくべきだった。そうすれば、「ブラック・コメディ」という葛藤劇も堪能できたはずである。

「ケインズの肖像はいわば引裂かれている」という西部であるが、筆者が日本では始めて注目していたケインズの「落日の肖像」にふれることはできなかった。はからずも、西部はその限界を自ら次のとおり、吐露している。

ケインズの亀裂を解釈する仕事はまだ手つかずである（西部）二〇頁

もちろん、西部には自覚はない。「この亀裂を解釈する仕事」を語ろうとする場合、ケインズの戦後通貨構想の有効性の是非を説明する作業をはずせば、その「仕事」は空文化するからである。この意味で西部の自己批判精神は旺盛なままである。

不幸は続く。西部の語るとおり、日本のケインズ学者は「そんな亀裂はないと言い張る」ようだ。より正確に言えば、彼らはそもそも、亀裂といわれる事情の是非について判断材料を持ち合わせていない。この意味で、「親ケインズ派の言説は虚偽であり」と解説する西部の分析は正鵠を射ている。そして西部の批判の刃は日本の「反ケインズ派」にも及ぶ。

その亀裂故にケインズのすべてを無効とみなす反ケインズ派の言動は短絡である（同前）

ここでも西部は正しい。日本の「反ケインズ派」も、晩節のケインズの「亀裂」を知らないので解題できない。そもそも、日本の「親ケインズ派」と「反ケインズ派」において、晩節のケインズの「亀裂」をめぐる論争があったことを筆者は聞かない。それは今回の平井の似非解題本でも確認できる。

かくて、西部をもじれば、いまこそ亀裂だらけだった晩節のケインズを解釈してみることの面白さがある。そしてこの種の亀裂を何ら解題できなかった日本のケインズ学者こそが、「深層において引裂かれているに違いない」という意味でも面白いのである。



以右からすれば、西部の名著は重い責任を負わねばならない。すでにみたとおり、この本の腰帯（旧岩波版）には「巨人の人となり、学問と、思想を立体的に解明」となっていたはずである。しかし、西部にあっては、ケインズという「巨人」の戦後通貨構想が、「立体的に解明」される対象からはずされていた。「立体的」どころか、超次元の世界へと追いやられてしまった。

二〇〇五年に復刊の運びに至った西部の名著、『ケインズ』は、一九八三年の時点、「ケインズの亀裂を解釈する仕事はまだ手つかずである」という重要な問題を提起した。現在はどうなのであろう（二〇〇八年半ば）。もう二〇年以上も経っているが、平井のケインズ解題がそれを雄弁に語るとおり、ケインズの亀裂について何も言及できない。これが日本のケインズ学者の到達点なのである。それも当然だろう。そもそも、塩野谷祐一のケインズの『一般理論』の訳本は意味不明の記述だらけだったのである。

## IX 誤訳で塗り固められた『一般理論』第12章 長期期待の状態

(i) 利子率による「予想収益の資本化」の「予想収益」の不明さ

■言葉も出ない翻訳文

塩野谷祐一の『一般理論』の訳にはただただ言葉を失うばかりである。「第二章 長期期待の状態」の一節と二節を読むと、かつてケインズがハイエクの著書を評した時の痛烈な表現を想起させられてしまう。一例を挙げておく。二節の最後の箇所の訳である。筆者はこれを読んだだけで、塩野谷はケインズの言いたいことを理解する学問的資質は何もないと断定することに躊躇しない。

投資物件の価値の変化はもっぱらその予想収益に関する期待の変化によるものであって、この予想収益を資本

化するさいの利子率の変化によるものではないとみなして叙述することにする。しかし、利子率変化の効果は、簡単に確信の状態の変化の効果の上に重ね合わせることができる（本稿冒頭に掲載した訳本の一四七頁、以下、頁番号のみ付す）

原文は次のとおりである。

.....we shall write, throughout the following sections, as if changes in the values of investments were solely due to changes in the expectation of their prospective yields and not at all to changes in the rate of interest at which these prospective yields are capitalised. The effect of changes in the rate of interest is, however, easily superimposed on the effect of changes in the state of confidence. (JMK.7, p.149)

塩野谷の訳のデータメさは原文と対比させれば一目瞭然となる。意味の通じる日本語は次のとおりだろう。

投資物件の価格が変化するのはもっぱらその予想収益に関する期待が変化するからであると仮定しておき、この予想収益を資本還元する元になる利子率が変動するためではないと仮定して叙述することにする。しかし利子率が変動すると景気動向に関する信認の状態は容易に増幅変化されてしまう。

拙訳はいささか意識の嫌いがあるが文意が通ることを優先させている。その意図は先に挙げた原文を参照すれば読者には納得していただけるだろう。

# ■金融論のイロハの確認

塩野谷は金融論のイロハも知らない。たとえば、「この予想収益を資本化するさいの利子率の変化」とは一体なんのことか？「these prospective yields are capitalised」は資本還元と訳すべき話である。塩野谷は一橋大学で一体まともに金融論を教えてきたのであろうか？さらに続けよう。

「利子率変化の効果は、簡単に確信の状態の変化の効果の上に重ね合わせることができる」という記述を理解できる読者がいるのだろうか？拙訳のように、「利子率が変動すると景気動向に関する信認の状態は容易に増幅変化されてしまう」とすれば意味はすぐに通じる。「confidence」の訳は塩野谷のように、「確信」でも意味は通じなくもないが、一般には「business confidence」として広く英語で使用されている状況を知っておくことであろう。金利の変化で株価が急変する事態こそが、「景気動向に関する信認の状態」に密接に関連すること念頭におけばすむ話である。

ケインズの同章第三節に関する塩野谷訳はさらに意味不明の記述が続出する。そして大間違いをした訳も頻出する。ここでは三つの例を出しておく。

まず日本語になっていない。その代表を挙げておく。この節の後半部分（訳本の一四八頁後半から一四九頁全体）、そして注の（一）、（二）は完全な間違いである。

便宜上、その段落を四つに区分して①、②、③、④それぞれに原文、拙訳を付しておく。ここで明らかなのは塩野谷がケインズを全く理解できない「ケインズ学者」であること。

■投資回収における株式会社の重要な機能

① しかし、旧式の個人企業に投資しようとする決意は、社会全体にとってばかりでなく、個人にとっても大部分取り消すことのできない決意であった。今日広く行きわたっている所有と経営の分離にともない、また組織された投資市場の発達につれて、時には投資を促進し、時には経済体系の不安定性を著しく高める、きわめて重要な新しい要因が導入された。証券市場がない場合には、われわれがすでに契約してしまった投資物件の再評価を頻繁に試みてみても何の役にも立たない

原文

Decisions to invest in private business of the old-fashioned type were, however, decisions largely irrevocable, not only for the community as whole, but also for the individual. With the separation between ownership and management which prevails to-day and with the development of organised investment markets, a new factor of great importance has entered in, which sometimes facilitates investment but sometimes adds greatly to the instability of the system. In the absence of security markets, there is no object in frequently attempting to revalue an investment to which we are committed. (pp.150-1).

拙訳

旧式の個人企業に対する投資決定は、社会全体にとってばかりでなく、個人にとっても大部分は変更不可能な(irrevocable)決定であった。しかしながら今日広く普及している所有と経営の分離にともない、また組織された投資市場の発達によって、投資を促進することもあれば経済体制の不安定性を著しく増加させてしまう極めて重要な新しい要因が導入された(株式会社のこと……これにより投資は容易に変更・回収可能

となる）。この証券市場を欠いてしまえば、われわれはすでに投資してしまった投資物件の価値をしばしば高めようとしても何の意味もなくなる。（括弧は便宜上、筆者が挿入）

### ①に関する塩野谷の理解の解題

‘committed’を「契約」としたのが躓きのもと。だから‘irrevocable’の意味も不明になる。決定的なことは株式会社の成立の意味を理解していないこと。これにより、その制度がない以前には投資回収ができにくい状況が打破される。いわゆる資本の流動化である。塩野谷はこれも理解できないのに、一体どうやってケインズの「流動性選択」を解説できるのだろう（実際、できない例が頻出）。

### ■投資物件選択が「契約」？

② しかし、株式取引所は多くの投資物件を毎日のように再評価し、その再評価は個人に対して（社会全体にたいしてではないが）彼の契約を変更する機会を頻繁に与えている。それはあたかも農夫が朝食後、晴雨計に打診して、午前一〇時から一時までの間に農業から彼の資本を引き揚げようと決意することができ、またその週の終わりに再び農業に戻るかどうかを考え直すことができるようなものである。（二四九頁、下線部分だけが誤訳ではない）

### 原文

But the Stock Exchange revalues many investments every day and the revaluations give a frequent opportunity to the individual (though not to the community as a whole) to revise his commitments. It is as though a farmer, having tapped his barometer after breakfast, could decide to remove his capital

from the farming business between 10 and 11 in the morning and reconsider whether he should return to it later in the week (JMK.7, p.151)

拙訳

しかし株式取引所では多くの投資物件は毎日価格変動しており、この価格変動が個人に対して（社会全体に対してではないが）、個人の投資先を見直す機会を与えている。それはあたかも農夫が朝食後、晴雨計に打診した、午前一〇時から一一時までの間に農業から彼の資本を引き揚げようと決意することができ、またその週の終わりに再び農業に戻るかどうかを考え直すことができるようなものである。（下線部分は塩野谷訳でまする）

②に関する塩野谷の理解の解題

下線部分はなぜか意味のわかる日本語訳になっている。下線部分は先行する文章の内容の一例として記述されている。ところが塩野谷はそこが全くわかっていない。農夫（正しくは農業資本家）は晴雨計を頼りに投資先を農業か非農業か頻繁に選択できるという話である。だから他の投資家も投資先（his commitments）を自由に取捨選択できるという話が先行するのである。

■投資における新規投資と企業買収の二つの選択

③ しかし、株式取引所の日々の再評価は、主として旧投資物件を一個人から他の個人へ移転することを容易にするために行われるものであるが、不可避的に今期の投資額に決定的な影響を及ぼす。なぜなら、現存の同種企業を買い取ることができるのに、それよりも多額の費用を払って新企業を起こすことは無意味である

し、他方、もし株式取引所において新計画の株式を売却し、即時的利益を得ることができれば、その計画に莫大と思われるような金額を支出する誘因も存在するからである（一四九頁）

原文

But the daily revaluations of the Stock Exchange, though they are primarily made to facilitate transfers of old investments between one individual and another, inevitably exert a decisive influence on the rate of current investment. For there is no sense in building up a new enterprise at a cost greater than at which a similar existing enterprise can be purchased; whilst there is an inducement to spend on a new project what may seem an extravagant sum, if it can be floated off on the Stock Exchange at an immediate profit.<sup>1</sup> (p.151)

拙訳

しかし、株式取引所で株価が日々評価し直されると、主に旧投資物件の一個人から他の個人への移転を容易にし、不可避的に現在の投資率に決定的影響を及ぼす。なぜなら、（株価が全般的に下がっている場合）現存する同種企業を買い取ることができる費用よりも多額の費用をかけて新企業を起こすことは無意味であり、他方、（株価が全般的に上がっている場合）、もし新企画を株式市場で上場し即座に利益を得ることができるならば、莫大と思われる金額を新企画に支出する誘因も存在しているからである（括弧は筆者が挿入）。

③ に関する塩野谷の理解の解題

塩野谷は「不可避的に今期の投資額に決定的な影響を及ぼす」という理由がわかっていない。ケインズの意図を

やさしく解題するとすれば、拙訳が明示するとおり、投資をする場合、既存の資本を買収するか、あるいは、新規投資するかを選択があり、株価が下がっている時は既存の企業を買収（だから投資額は増えない）、上がっているときはIPOを行えばよい（だから投資額は増える）という話である。‘floated off’は新企画を株式市場にすることであり、‘at an immediate profit’は上場して新株を売り抜けて大もうけするという話である。証券市場の基礎知識に欠ける人間がケインズを解説すると目も当てられなくなる一例が塩野谷訳なのである。

■『貨幣論』に書かれていることくらい参照して訳してほしい

こういうことがサッパリ理解できない塩野谷なので原注（1）もとんちんかんな訳になっている。ケインズはこの自説に関し、『貨幣論』を参照するように注で指示しているが、塩野谷は『貨幣論』さえ理解できないのだから、原注（1）におけるケインズの意図を完全に見過ごした訳になっている。一応参考のためにその訳を掲示しておく。

私は……、ある会社の株式がきわめて高く評価され、そのために会社がより多くの株式を有利な条件で発行することによってより多くの資本を調達できる場合には、低い利子率で借入れをすることができると同じ効果をもつということを指摘した。いまや私はこれを次のように叙述したい。すなわち、現存株式に対する高い相場はそれに対応する類型の資本の限界効率の上昇を意味し、したがって利子率の低下と同じ効果をもつ（なぜなら、投資は資本の限界効率と利子率の比較に依存するから）、と。（一四九頁）

これを一般の読者に容易に理解できる日本語にしてみよう。拙訳は以左のとおり。

私は……、ある会社の株式に非常に高い価格がつき、そのために会社がより多くの株式をより有利な条件で発行し、より多くの資本を調達できる場合、あたかも低い利率で借り入れできるような同じ効果を持つことを



指摘した。いまや私はこれを次のように叙述したい。すなわち、ある企業の現存の株式に高い値がついているとすれば、類似した企業の株価も同様に上がるので類似するこの企業の資本の限界効率も上がることになり、したがって利子率の低下と同じ効果をもつ（なぜなら投資は資本の限界効率と利子率の動きを比較しながら行われるからである）

塩野谷訳と拙訳を比較すればどちらがケインズの意図を伝えているのか簡単に判断できるだろう。ちなみに原注の原文は以左のとおり。

I pointed out that when a company's shares are quoted very high so that it can raise more capital by issuing more shares on favourable terms, this has the same effect as if it could borrow at a low rate of interest. I should now describe this by saying that a high quotation for existing equities involves an increase in the marginal efficiency of the corresponding type of capital and therefore has the same effect (since investment depends on a comparison between the marginal efficiency of capital and the rate of interest). (p.151)

この点をいみじくもケインズは『貨幣論』ですっきりと解説している。すっきり理解できないのが塩野谷である。そこを解題しておく。これは一九二八―二九年のニューヨーク株式ブーム時の金利と株価の関係のことである。金利は高騰していたが株式ブームはこれをものとしなかった。株式投機の際に高い金利を払っても株価上昇でうける人が多かったからである（もちろんその直後急落）。すると企業は高い株価で新株を発行できるので低い金利で資金調達するのと同じ効果を享受できた。これがケインズ『貨幣論』の主張である。このように実に簡単な話は塩

野谷の頭脳をフィルターにすると五里霧中の文章に変容してしまう。

■株式市場の株価変動を律する主体は誰なのか？

④ このようにして、ある種の投資物件は、専門的企業者の真正の期待によるよりもむしろ、株式取引所で取引する人たちの、株式価格に現れる平均的な期待によって支配されるのである。<sup>(2)</sup> それでは、現存投資物件のこのようなきわめて重要な毎日あるいは毎時の再評価は、実際にどのようにして行われるのであろうか（一九九頁）

原文

Thus certain classes of investments are governed by the average expectation of those who deal on the Stock Exchange as revealed in the price of shares, rather than by the genuine expectations of the professional entrepreneur.\*<sup>2</sup> How then are these highly significant daily, even hourly, revaluations of existing investments carried out in practice? (p.151)

拙訳

このように、特定の部類の投資物件の価格を律するのは、専門的起業家の真性な期待というよりも、むしろ株式取引所で取引する人々の、株価に示される平均的期待である。<sup>(2)</sup> それでは実際どのようにして現存の投資物件の価格が毎日あるいは毎ときわめて著しく変化するのだろうか？

④に関する塩野谷の理解の解題

「きわめて重要な毎日あるいは毎時の再評価」の「重要」は原文では significant であり、「著しい」の意味の取り

違えである。これはたんなる誤訳でなく、ケインズの意図を理解していないことから生じる致命的ミスである。そして塩野谷のような訳でいくと、次の四節における株式市場の変動の要因に関するケインズの説明を理解できなくなる。したがって原注（2）の訳もひどい内容に終わっている。それを挙げておく。

塩野谷の原注（2）訳

もちろん、このことは大きな市場性をもたない種類の企業とか、流通可能な証券が存在しないような種類の企業には当てはまらない。その例外の中に入る種類は古い時代には多かった。しかし、新投資の価値全体の中で占める比率として見れば、それらの重要性は急激に低下している（一四九頁）

原文

This does not apply, of course, to classes of enterprise which are not readily marketable or to which no negotiable instrument closely corresponds. The categories falling within this exception were formerly extensive. But measured as a proportion of the total value of new investment they are rapidly declining in importance (p.151)

拙訳

もちろん、このことは簡単に株式に値がつかず取引のできない企業とか、あるいはそれに非常に類似する企業の株に流通性がない場合には当てはまらない。この例外の中に入る部類の企業は以前は非常に多かった。しかし（現在は）、新規投資の価値全体の中に占める比率は急激に低下している。

塩野谷が原注（2）を何も理解できない理由は簡単に説明できる。投機的取引の対象となる株は市場性が高く容易に売買が成立するものでなければならぬ。しかし市場性の低い株は容易に売買が成立しないので投機の対象に

なりにくい。その点をケインズが本文で強調しているはずであり、原注(2)でそれを補足説明している。ところが本文もよく理解できない塩野谷は、原注の意味をますます理解できなくなってしまう。

#### (ii) 第四節の誤訳の露天掘り

##### ■「慣行」の意味もわからない投資選択論

以右、塩野谷がケインズの『一般理論』の「第12章 長期期待の状態」の第三節を何も理解していなかったことを詳細に明らかにしてきた。とすれば次の第四節においてもケインズが一体何をいいたいのかわかるはずもない。原文でもわずか二頁文の記述であるが、塩野谷は肝心の箇所(原文で第三パラグラフ)も意味不明の訳でごまかそうとしている。非常に重要な箇所なのでこの節の第三パラグラフ全体を検証する。長い段落なので便宜上、①、②に分けてみる。

##### 塩野谷訳

① なぜなら、もし組織化された投資市場が存在し、われわれが慣行の維持を頼りにすることができるならば、投資家は、自分の冒す唯一の危険は近い将来における情報の真正の変化の危険だけであって、その変化の可能性については自分で判断を下すことができるし、しかもその変化はあまり大きなものではなさそうだという考えによって、正当に自分を元氣付けることができるからである。なぜなら、慣行が妥当すると仮定すれば、彼の投資の価値に影響を及ぼしうるものはこれらの変化だけであって、一〇年後に彼の投資の価値がどうなるかについて何の考えももたないからといって不安に明け暮れる必要はないからである(一五一頁)

##### 原文

For if there exist organised investment markets and if we can rely on the maintenance of the convention,

an investor can legitimately encourage himself with the idea that the only risk he runs is that of a genuine change in the news over the near future, as to the likelihood of which he can attempt to form his own judgement, and which is unlikely to be very large. For assuming that the convention holds good, it is only these changes which can affect the value of his investment, and he need not lose his sleep merely because he has not any notion what his investment will be worth ten years hence (JMK.7, pp.152-3).

拙訳

① なぜなら、もし組織化された市場が存在し、われわれが慣行の持続をあてにできるならば、投資家は自身の冒す唯一のリスクは近い将来における情報間違いなく変化するというリスクだけであると考える、自身を当然にも鼓舞できる。その変化の可能性については自身で判断を下そうと試みることができるし、その変化はあまり大きなものになりそうにもないからである。なぜなら、慣行が妥当するならば彼の投資物件の価値に影響を及ぼしうるものはこれらの近い将来における情報の変化だけであり、今後一〇年間に彼の投資物件価値がどれくらいになるのかわからないからといって不安に明け暮れる必要はないからである。

①に関する塩野谷訳の解題

‘ten years hence’の意味を塩野谷は理解できない。「一〇年後に彼の投資の価値がどうなるか」を投資家は憂えているわけでない。「今後一〇年間」の時期の価値が気になるのである。塩野谷は長期投資を行う投資家の心理を読み取れないからである。「近い将来における情報」が変化しても長期の「慣行の持続」で自身の投資物件の価値が安定していれば安心だという話である。短期的投資の投機家と長期的投資の投資家の心理の違いを描写しようとするの

がケインズであることが塩野谷には理解の範囲外なのである。だから次の②になると塩野谷はいよいよ本領を発揮する。ケインズの言いたいがサッパリ理解できない訳をして、しかもそれに平然としておられるのである。

■「固定」と「流動化」の区別くらいつけてほしい

- ② このようにして、もし個々の投資家が慣行に破綻がないことを信頼し、また多くのことが起こる以前に判断を改訂し投資を変更する機会があることを信頼してさしつかえないとすれば、投資は短期間したがって短期間の連続—どんなに長いものであろうと—を通じて、個々の投資家にとってかなり「安全」なものとなる。社会全体としては「固定している」投資も、このように個々人にとっては「流動的」なものとなる（一五一頁）

原文

[Thus investment becomes reasonably 'safe' for the individual investor over short periods, and hence over a succession of short periods, however many, if he can fairly rely on there being no breakdown in the convention and on his therefore having an opportunity to revise his judgement and change his investment, before there has been time for much to happen. Investments which are 'fixed' for the community are thus made 'liquid' for the individuals. (p.153)]

拙訳

このようにして、個々の投資家は慣行が無効になることはないことをあてにし、また多くのことが起こる時より以前に判断を修正し投資先を変更する機会をあてにしてもよければ、投資は短期間が複数にまたがり、そしてそれがどれだけ多く連続しようとも、個々の投資家にとって投資はかなり「安全」なものとなる。社

会全体としては「固定化して流動化できない」投資も、このように個々人にとっては「流動的」なものとなる

## ②の塩野谷訳の解題

「社会全体としては『固定化している』投資も、このように個々人にとっては『流動的』なものとなる」と訳している塩野谷は何を自分で書いているのかわからないだろう。だから読者も迷路に連れ込まれる。

それを解く鍵は実は原文 p.151（訳文二四九頁の箇所）にある。塩野谷訳を拙文に直しておいた、「株式取引所では多くの投資物件は毎日価格変動しており、この価格変動は個人に対して（社会全体に対してではないが）、個人の投資先を見直す機会を与えている」という箇所である。この意味するところは、個々の投資家は株式を売って投資先を変更して「流動化」できるが、株を売って「流動化」する人がいればその反対に株を買って投資を「固定化」する人があり、社会総体で言えば個々人すべてが「流動化」することはできないことになる。

面白いことに、訳注がやけに好きな塩野谷であるが自身の意味不明な訳文に関し訳注はほとんどない。自身が何も理解していないことをわかっていると勘違いしているわけである。あるいは本当にわかっていないので訳注を付しようもなかったのかもしれない。

なお、塩野谷の場合、「慣行」という用語が頻出しているが原文は 'convention' である。これは長期投資の対象先の期待収益に大きな変化がないという意味で「慣行」となっている。

## （iii）台無しにされた美人投票方式の投資

第五節はいわゆる美人投票の話がでるところである。有名な話のはずであるが、その説の翻訳がデタラメである

ことは有名になっていないようだ。そこでそれも有名にすべく、面白く解説しよう。

玄人的投資家と何か。仲間を出し抜き、群衆の裏をかき、質の悪い株を高く売り抜け、質の高い株に空売りをかけたりする人のことである。玄人筋はつねに一般投資家に頭一つ抜きんでて、通例の株価評価の根拠材料が変化することを予測し、これを最大限利用するのである。

塩野谷はまずこの訳ができていない。「(玄人投資家は)一般大衆にわずか先んじて評価の慣行的な基礎の変化を予測する」(一五三〜四頁)。「評価の慣行的な基礎」は原文では「foreseeing changes in the conventional basis」(p. 154)に対応しているが、この「basis」の訳は「根拠」とすべきであり、「基盤」と訳したら何を言いたいのか理解できないだろう。

# ■「元より知力」を欠いた投資解題

そのような翻訳センスの持ち主がケインズの投資論を解題しようとするから悲劇が生じる。以左の訳文の箇所もひどい(原文は p.157)

人間本性は早急な結果を欲している。手っ取り早い金儲けには特別の楽しみがあり、遠い将来の利得は、普通の人はこれをきわめて高い率で割り引くものである。玄人筋の投資の遊戯は賭博的本能をまったく欠いている人にとっては耐え難いほど退屈なものであり、辛いものであるが、他方、そのような本能をもっている人は、この性向に対して相応の料金を支払わなければならない。さらに、短期の市場変動を無視しようとする投資家は安全のために多額の資金を必要とし、借入資金をもつてする場合には、やるにしてもあまり大規模な操作をしてはならないのである―このことは、知力と資力の手持ちを一定とすれば、遊戯から得られる収益の方が高いもう一つの理由である(一五五頁)



原文

— human nature desires quick results, there is a peculiar zest in making money quickly, and remoter gains are discounted by the average man at a very high rate. The game of professional investment is intolerably boring and overexacting to anyone who is entirely exempt from the gambling instinct; whilst he who has it must pay to this propensity the appropriate toll. Furthermore, an investor who proposes to ignore near-term market fluctuations needs greater resources for safety, and must not operate on so large a scale, if at all, with borrowed money—a further reason for the higher return from the pastime to a given stock of intelligence and resources (JMK.7, p.157)

拙訳

人間の本性上、早急な成果が求められる。手っ取り早く金儲けしようとすることには特別の強い関心が向くものであるが、普通の人は将来の利益が遠ければ遠いほどますます本気にしなくなる。玄人筋の投資の遊戯は賭博的本能からまったく縁遠い人にはだれにもうんざりするものであり精神的に非常にしんどいものである一方、そういう本能をもっている人はこの性癖に対しそれ相応の報いを覚悟しなければならない。さらに、短期の変動を無視しようとする投資家は安全上、より多くの資金が必要となり、仮に資金を借りて投資する場合も大規模に借り入れて投資してはならない。元より知力と資金をある程度備えた遊戯の投資にはより多くの収益が与えられるもう一つの理由である。

■ キャピタルゲインとインカムゲインの区別はどこへ行った？

だからこの美人投票の節の原注（一）もとんでもない訳になる。あまりにおかしい訳なので武士の情けの精神が

鎌首をもたげてきそうであるが、ここは学問精神を優先させる。

塩野谷は株式投資の場合のインカムゲインとキャピタルゲインの区別がつかない。前者は利益配当を意味し、後者は株価上昇を意味する。ケインズの投資論を解題する前に経済学の素養を積むことだろう。

#### 塩野谷の訳

投資信託や保険会社がしばしば投資証券からの所得だけでなく、市場におけるその資本評価をも計算する場合のやり方は、通常慎重であると考えられているけれども、後者の短期的変動にはあまりにも多くの注意を向ける傾向がある（一五六頁）

#### 原文

The practice, usually considered prudent, by which an investment trust or an insurance office frequently calculates not only the income from its investment portfolio but also its capital valuation in the market, may also tend to direct too much attention to short-term fluctuations in the latter (JMK, 7, p.157)

#### 拙訳

投資信託や保険会社は投資証券のインカムゲイン（株式の配当、債券の利払い）ばかりでなく資本市場における資本価値の上昇（株価と債券価格の上昇というキャピタルゲイン）をあてにすることがしばしばのことであり、このやり方は通常分別があると考えられているけれども、後者の短期的変動（すなわちキャピタルゲイン）にあまりにも多くの注意が向けられがちである（括弧は便宜上、筆者が追加）

ここから明らかなこと。塩野谷にはケインズを理解する学問的センスに乏しい。細かな点で言えば、‘calculates’ ‘the market’ ‘also’の意味に注意が向いていない。なお余談になるが、ケインズが投機的投資に慎重

なコメントを残したのは訳があるようだ。平井がとんでもない誤訳をしている一九二〇年の先物取引で危ない投機に深くのめり込むことにケインズは自らへ訓告していると思われるのであるが、読者はどう考えるだろう。

（iv）「信用の状態」を理解できない信用論・景気循環論

■「信用の状態」のなかで金融機関は何をするのか？

以右で塩野谷の経済学的センスの程度を指摘した。しかしそれが全く不当でないことを明らかにしよう。五節の最後の文である。景気循環における信用の役割をサッパリ理解していないのである。

これまで、われわれは主として投機家または投機的投資家自身の確信の状態を念頭においており、その場合、もし彼自身が将来の見込みに満足しさえすれば、彼は市場利子率で貨幣を無制限に手に入れることができる。暗黙のうちに想定していたように見えるかも知れない。もちろん、このことは正しくない。

したがって、われわれは確信の状態の他の面、すなわち時に信用の状態ともいわれる、金融機関が借手に対して抱く確信の状態をも考慮に入れなければならない。資本の限界効率に悲惨な影響を及ぼした株式価格の暴落は、投機的な確信あるいは信用の状態のいずれかが弱まったことによるものであったといえよう。しかし、暴落を引き起こすにはそのいずれかが弱まることで十分であるのに、回復するためには両者がともに復活することが必要である。なぜなら、信用の弱まることは暴落をもたらすのに十分であるけれども、それが強まることは、回復にとって必要条件ではあるが、十分条件ではないからである（一五六頁、下線部分は誤訳ではない）したがって原文はそれ以外のところを引く）

原文

Thus we must also take account of the other facet of the state of confidence, namely, the confidence of

the lending institutions towards those who seek to borrow from them, sometimes described as the state of credit. A collapse in the price of equities, which has had disastrous reactions on the marginal efficiency of capital, may have been due to the weakening either of speculative confidence or of the state of credit. But whereas the weakening of either is enough to cause a collapse, recovery requires the revival of *both*. For whilst the weakening of credit is sufficient to bring about a collapse, its strengthening, though a necessary condition of recovery, is not a sufficient condition, (p.158)

拙訳（塩野谷の以右の下線部分は省略）

したがって、われわれは事業信認の状態の裏面、すなわ貸出機関が金を借りようとする人々に対する信頼度  
の状態、時に融資姿勢（the state of credit）と称される状態をも考慮にいれなければならない。資本の限界  
効率に悲惨な影響を及ぼした株価暴落は、投機的な事業信認あるいは融資姿勢のいずれかが弱まったことに  
よるものであったといえよう。しかし、暴落を引き起こすにはそのいずれかが弱まることで十分であるのに  
対し、回復するためには両者がともに復活することが必要である。なぜなら、融資姿勢が弱まることは暴落  
をもたらすのに十分であるが、融資姿勢が強まることは景気回復の必要条件ではあるが、十分条件ではない  
のである。

塩野谷のように「信用の状態」と訳すと金融機関の融資姿勢の強弱の変化は何も訳出できなくなる。また事業信  
認を「確信」と訳すと金融機関の融資姿勢と金を借りようとする人々の関係の変化を何も伝えられなくなる。要す  
るに景気変動の考察ができなくなる。塩野谷は一体シュンペーターの何を勉強していたのだろうか？

（v）「企業」を死に迫いやる投資論—またまたキャピタルゲインへの無理解

さて次は第六節の検討に移る。ここでも塩野谷は致命的誤訳に陥っている。それは「企業」を誤訳していることである。そのため、「企業」を勝手に死に迫いやることになる（詳しくは（上）第六節）。さらに問題なのは証券の信用取引を何も理解していないこと。インカムゲインとキャピタルゲインの区別がつかないのである。これによってケインズの「流動性選好」の概念を説明できるのだろうか？

■「企業」と「投機」はどうやって比較できるのか？

まず塩野谷はケインズの断り書き（‘speculation’と‘enterprise’に関する）を完全に無視してしまった。このため平井も「企業」と「投機」の関係を完全に誤解してしまった。

第六節の第一パラグラフ（pp.158-9, 塩野谷訳で一五六から七頁）の大半が誤訳である。まず一つ目。

塩野谷訳

もし投機（speculation）という言葉を市場の心理を予測する活動に当て、企業（enterprise）という言葉資産の全存続期間にわたる予想収益を予測する活動に当てることが許されるなら、投機が企業以上に優位を占めるということは必ずしもつねに事実ではない。しかし、投資市場の組織が改善されるにつれて、投機が優位を占める危険は事実増大する。世界における最大の投資市場の一つであるニューヨークにおいては、投機（上述の意味における）の支配力は巨大なものである（一五六〜七頁）

原文

If I may be allowed to appropriate the term *speculation* for the activity of forecasting the psychology of the market, and the term *enterprise* for the activity of forecasting the prospective yield of assets over

their whole life, it is by no means always the case that speculation predominates over enterprise. As the organisation of investment markets improves, the risk of the predominance of speculation does however, increase. In one of the greatest investment markets in the world, namely, New York, the influence of speculation (in the above sense) is enormous. (pp.158-9)

# 拙訳

もし *speculation* という言葉を市場の心理を予測する活動として使用し、*enterprise* という言葉を資産の全存続期間にわたる予想収益を予測する活動として使用することが差し支えなければ、市場の心理を予測する活動が資産の全存続期間にわたる予想収益を予測する活動よりも優位を占めるということは必ずしも事実であるわけではない。しかし、投資市場の組織の発展につれて、市場の心理を予測して投資する投機活動が優位を占める危険は増大する。世界における最大の投資市場であるニューヨークにおいては市場の心理を予測して投資する投機活動（前述の意味における）の影響力は絶大である。

塩野谷はケインズがなぜ第五節で美人投票を引き合いに出したのか理解していない。ケインズは市場心理を予測して投資する投資活動が企業の予想収益を予測する投資活動を圧倒する状態を問題視しているのである。日本語でいう投機と企業を比較している訳でない。だからこそケインズがわざわざ *enterprise* に関し、断り書きをしているのである。

塩野谷の訳（「アメリカという」この国民的な弱点は株式市場の上にその因果応報を表している」をパロディ化すれば、「塩野谷の学問的弱点はケインズの投資理論の上にその因果応報を表している」ということにしてさしつかえない。

（vi） 英米の証券市場比較がサッパリできない比較論

第六節の第一パラグラフの後半のすべてもひどい誤訳である。これは便宜上、①、②、③に分けて掲載し、次に原文、拙訳を提示する。そうする理由は単純明快である。英語力の貧弱さ、文献を読み解く明察の欠如。それをすべて備えているのが塩野谷であることを改めて確認するためである。

■再びキャピタルゲインとインカムゲインへの無理解

塩野谷訳

① アメリカ人は、多くのイギリス人が今なおやっているように、「所得のために」投資するということはまれであつて、資本の価値騰貴の望みがないかぎり、投資物件をおいそれとは買おうとしないといわれる。このことは次のことを別の言葉で表現したまでのものである。すなわち、アメリカ人は投資物件を買う場合、その予想収益よりもむしろ評価の慣行的基礎の有利な変化に対して望みをかけており、アメリカ人は上述の意味における投機家である、ということがそれである（一五七頁）

原文

It is rare, one is told, for an American to invest, as many Englishmen still do, 'for income'; and he will not readily purchase an investment except in the hope of capital appreciation. This is only another way of saying that, when he purchases an investment, the American is attaching his hopes, not so much to its prospective yield, as to a favourable change in the conventional basis of valuation, i.e. that he is, in the above sense, a speculator. (JMK.7, p.159)

拙訳

アメリカ人は、多くのイギリス人が今なおやっているように、「インカムゲイン（配当、利子）のために」投資するということはまれであって、キャピタルゲイン（株価、債券価格上昇）の望みがないかぎり、投資物件をおいそれとは買おうとしないといわれる。このことは次のことを別の言葉で表現したまでのことである。すなわち、アメリカ人は投資物件を買う場合、その予想収益に望みをかけるといよりは、むしろ証券価格に関する慣行的評価の根拠が有利に変化することに望みをかけており、アメリカ人は上述の意味における投機家である、ということがそれである。

①の塩野谷訳に関する解題

本稿において以前に指摘したことであるが、塩野谷は‘for income’、‘capital appreciation’の意味がわからない。だから投機家がなぜ、‘a favourable change in the conventional basis of valuation’に期待するのかサッパリ見当がつかない。この理由も簡単だろう。塩野谷はケインズが何のために美人投票と投機の間係を詳述していたのか理解できていないのである。

■「泡沫」と化した誤訳の「渦巻き」

② 投機家は、企業の着実な流れに浮かぶ泡沫としてならば、なんの害も与えないであろう。しかし、企業が投機の渦巻きのなかの泡沫となると、事態は重大である。一国の資本発展が賭博場の活動の副産物となった場合には、仕事はうまくいきそうにない（一五七頁）



原文

Speculators may do no harm as bubbles on a steady stream of enterprise. But the position is serious when enterprise becomes the bubble on a whirlpool of speculation. When the capital development of a country becomes a by-product of the activities of a casino, the job is likely to be ill-done. (p.159)

拙訳

投機家が enterprise（資産の全存続期間にわたる予想収益を予測する活動）という静かな流れに浮かぶいくつかの泡であるかぎり何の害も与えないだろう。しかし、資産の予想収益を予測する活動が、投機の渦巻きに浮かぶ一つの泡沫になると、事態は深刻となる。一国の資本形成が賭博場の活動の一つの添え物（a by-product）になった場合は、ことはまずくなるだろう。

②の塩野谷訳に関する解題

‘bubble’が複数であること、そして次に‘the bubble’で単数になっていることに塩野谷は気づいていない。そもそも投機と企業は比較のしようがない。‘enterprise’を「企業」と誤訳している塩野谷にとって、ケインズが短期的投機的投資と長期的安定的投資を例えて比較していることに気がつかないのも当然のことである。

■ウォール街は何をすることか？

③ 新投資を将来収益から見て最も利潤を生む方向に向けることを本来の社会的目的とする機関として眺めた場合、ウォール街の達成した成功の度合いは、自由放任の資本主義の顕著な勝利の一つであると主張することはできない―もし私のように、ウォール街の最もすぐれた頭脳は実際にはそれとは異なった目的に向けら

れてきたと考えることが正しいならば、このことは驚くべきことではない（一五七頁）

#### 原文

The measure of success attained by Wall Street, regarded as an institution of which the proper social purpose is to direct new investment into the most profitable channels in terms of future yield, cannot be claimed as one of the outstanding triumphs of *laissez-faire* capitalism — which is not surprising, if I am right in thinking that the best brains of Wall Street have been in fact directed towards a different object. (JMK.7, p.159)

#### 拙訳

ウォール街を、本来の社会的目的が新規投資を将来収益からみて最も利潤を生む経路に向けることにある制度とみなすとすれば、それが達成した成果を自由放任の資本主義の著しい勝利の一つであると主張することはできない——このことは驚くべきことでない。ウォール街の最もすぐれた頭脳が実際にはそれとは異なった目的（すなわち投機）に向けられてきたと考える私が正しいとすれば（括弧は筆者が挿入）。

#### ③の塩野谷訳に関する解題

塩野谷は英語の単語の意味の選び方の基本にも暗い。‘an institution’の訳がそれである。そして文脈上、ケインズが何を主張したいのか、あるいは何を皮肉っているのか、それを理解できる訳文を提起できないのである。

#### ■ロンドンとニューヨークの証券市場はどう比較されるのか？

しかし奇蹟は起こるものである。第六節の原注（1）の訳は基本的には正しい。そこはケインズが投機を抑制す

る方法を提起するためにロンドンとニューヨークの証券市場の比較をしている箇所である。ところが原文の本文の訳は完全にまちがっている。しかもご丁寧なことに自身が付した訳注も完全に間違っている。

塩野谷が証券市場論を何も知らないという筆者の主張が不当なものでないことをここでも再確認しておく。それは原文の第二パラグラフの後半の部分である。そしてついでに塩野谷の訳注の記述内容も不明さも紹介しておく。

ロンドン株式取引所における取引に付随するジョバーの「売買差益」、ブローカーの高い手数料、<sup>〔訳者注〕</sup>大蔵省に納める重い移転税は、市場の流動性を減少させ（もつとも二週間決済の慣行はそれとは別の作用をするけれども）、ウォール街の特徴となっているような取引の大部分を取り除いている。<sup>〔一〕</sup>合衆国において投機が企業に比べて優位である状態を緩和するためには、政府がすべての取引に対してかなり重い移転税を課することが、実効可能で最も役に立つ改革となるであろう。（二五八頁）

#### 原文

The jobber's 'turn', the high brokerage charges and the heavy transfer tax payable to the Exchequer, which attend dealings on the London Stock Exchange, sufficiently diminish the liquidity of the market (although the practice of fortnightly accounts operates the other way) to rule out a large proportion of the transaction characteristic of Wall Street. The introduction of a substantial government transfer tax on all transactions might prove the most serviceable reform available, with a view to mitigating the predominance of speculation over enterprise in the United States. (JMK.7, pp.159-60)

#### 拙訳

ロンドンの株式取引所における取引に付随するジョバーの「売買差益」、ブローカーの高い手数料、大蔵省に納める高い譲渡税 (the heavy transfer tax) により、ウォール街の特徴となっているような取引（すなわ

ち投機的取引)の大部分をなくすほど市場の流動性は十分に減少している(もつとも二週間決済制度はその反対に、流動性を増加させる、すなわち投機を助長させるのであるが)。市場の心理を予測して行われる投機活動の方が資産の全存続期間にわたる予想収益を予測する投資活動よりも優位にある合衆国のような状態を是正するためには、政府がすべての株取引に対してかなり高い譲渡税を導入することが実効的な手段として最も役に立つ改革となるであろう。

#### ■信用取引を理解できない代償としての学問的追証

‘transfer tax’は日本流に言えば譲渡税のことである。塩野谷はケインズが「二週間決済」について何を言いたいのか理解していない。単に証券取引の決済が二週間だと思っているようだ。思っていなければ訳注を付すはずである。しかしそれはできない。なぜなら訳注がまちがっているからである。訳者注の四四頁では、「ジョバーとは顧客とは直接取引せず、自分の計算で証券売買を行い、差益を稼ぐ。ブローカーとは顧客から売買の注文を受け、その代理人としてジョバーと取引し、仲介手数料を稼ぐ」となっている。これは証券取引に無知だからできる訳文である。「自分の計算で証券売買を行い」は「自己勘定で証券売買」を行うという意味である。いわゆるディーラーであり、「自己勘定」で取引するからこそ、売買差益で稼げるのである。これに対し、ブローカーは「自己勘定」で取引しない。だから売買差益でなく売買委託手数料で稼ぐのである。

では塩野谷に代わり、「二週間決済」に筆者版訳注を付しておく。ロンドン証券市場の場合、英国国債などの公債の売買の決済は取引実施日後の三日以内に決済することになっているのに対し、その他の証券の決済期限は通常、二週間となっている。これが投機を助長する要因になる。株を信用買いする人は二週間の間、金を払う必要がないし、株を信用売りする人はその間に株を引き渡す必要がない。信用買いたした人は決済日まで株が上がり売れば

よいし、信用売りした人は決済日までに株が下がれば安く買い戻せばよい。株や現金がなくても取引ができるのである。だからこそ二週間決済制度が投機行動を助長する。これをケインズは言いたかったのである。塩野谷訳ではその点がさっぱり訳出できていない。

■債券は何時から「債権」に化けたのか？

必要はことを訳注に回さず、まちがったことを訳注で書いてしまう。これが塩野谷の特長である。これは第二章の解説だけにとどまらない。塩野谷はケインズの第三章（「利子率の一般理論」）の訳注でもとんでもないことを書いている。第一に金融タームの基本を知らないこと。第二に、ケインズの『貨幣論』を読んだふりをしたこと。その訳注の四五頁では、およそケインズ学者としては信じられないことを、以左のとおり、平気で書いている。

利子率と債権価格とは逆関係にあり、利子率の上昇（下落）は債権価格の下落（上昇）をもたらす。「弱気筋」とは将来利子率が上昇し、債権価格が下落すると予想して、債権よりも貨幣保有を選ぶ人々を指し、「強気筋」とは、逆に、将来利子率が下落し、債権価値が上昇すると予想して、債権を保有し、貨幣の借入を選ぶ人々を指す。「二つの意見」とは弱気筋と強気筋の意見をいう（訳注四五頁）

塩野谷のいわゆる「債権」は債券と勘違いしたものである。ケインズの原文では「the present rates of interest for debts of different maturities」（p.168）となっているとおり、満期の異なる債券の金利の話をしている。実際、原文の p.171 「the price of bonds」という表現が利子率変動との関連で問題にされているが、何と塩野谷はこれを「債券価格」と正しく訳出している（一六九頁）。

というわけもあり、訳本のあらゆる箇所が債券が「債券」に、あるいは「債権」へと衣装を着せ替えられるので

ある。これによくケインズの流動性選好説を解題できるものである。訳出がうまくできないのにはもう一つわけがある。ケインズの『貨幣論』を読んだふりをしたこと。

塩野谷がケインズの言葉として挙げている「二つの意見」(two views)は『貨幣論』の原文(JMK.6, p.175)にある。しかしこの場合の「二つの意見」を意味する「弱気筋」と「強気筋」のうちの「強気筋」は株が上昇することとを期待して金を借りて投機する人のことであり、「将来利子率が下落し、債権価値が上昇すると予想して、債権を保有し、貨幣の借入を選ぶ人々」とはまったく関係ない人々のことである。『貨幣論』の該当箇所を読めば明らかに、投機の盛んだった二八〇二九年のニューヨーク株式市場では金利が上昇していたにもかかわらず株取引が過熱化していた。だからこの時の「強気筋」(この訳は妥当しないが)は「将来利子率が下落し、債権価値が上昇すると予想して、債権を保有し、貨幣の借入を選ぶ」はずがない。金を借りて株を買おうとするのである。ここで引用している塩野谷の「債権」とはもちろん債券の間違いである。

ここで確認できること。塩野谷には株と債券の区別も、あるいは債券と「債権」の区別もつかないまま、流動性選好を論じてしまったこと。これを筆者は最近のサブプライムローン問題に絡ませ、流動性恐慌と呼んでおく。

およそウソみたいな話であるが、筆者の主張が突拍子もない話でないことを実証してくれるのが他ならぬケインズであり、『貨幣論』と『一般理論』を比較して読めば、ケインズこそが塩野谷のような誤解をしないよう注意書きしていることは簡単に確認できる。

ではそれを早速、例証しておこう。『貨幣論』の問題箇所ではケインズは「弱気筋」のことを「株(stocks)」よりも貨幣(money)の保有を選好する」(JMK.6, p.175)と定義している。他方、塩野谷は、「弱気筋」とは将来利子率が上昇し、債権価格が下落すると予想して、債権よりも貨幣保有を選ぶ人々を指し」と書いてしまった。これが塩野谷による『貨幣論』に関する『一般理論』における補足説明に対する訳注である。

ここまでくるとはや明らかであろう。塩野谷はケインズの『貨幣論』を参照せずに、『一般理論』における「流動性選好」を説明しようとしてしまったことが。

もちろん日本のケインズ学者の中にはまともにケインズを訳せる人もいる。『貨幣論』の場合、長澤惟恭これやすの訳は塩野谷の『一般理論』訳よりはるかにわかりやすい。

長澤はケインズによる「弱気筋」の定義について訳者注で次のとおり、それなりに正確に付している。「すなわち空売りを含めて、通常の場合以上に証券を売り、貨幣的資産に代えている人々」のことであると書いている。ということは塩野谷は長澤訳さえ参照していないことになる。自身が原文の『貨幣論』を解題する能力がない場合、その訳本を参照すればよいのに、それさえ怠っている。

ちなみに長澤訳はケインズ全集第6巻訳として一九八〇年に出版され、塩野谷の『一般理論』訳は一九八三年に出版されている。塩野谷は長澤訳を参照する機会があったはずである。にもかかわらずそうしていない。いかなる理由で塩野谷が長澤訳を参照しなかったのか、興味津々である。ケインズが『一般理論』で参照を指示している『貨幣論』の適切な訳文も見ない、しかも原文も読んだ気配もない。ここで塩野谷は自分が読んでいると反論するわけにはいかない。そうすると『貨幣論』の該当箇所を理解できる能力がないことを暴露することになってしまう。いづれにしろ、学者にとって、危険極まりない、妙な虚栄心が災いしたようだ。

ケインズは『一般理論』において「流動性選好」を説明する場合、『貨幣論』における「流動性選好」に相当する記述への参照を強調している。ところが、塩野谷はその基本的作業を怠ってしまった。そのためもあり、『一般理論』ではちんぷんかんぷんの訳しかできなかった。いうことはケインズを読んでも「流動性」の概念は何も理解していなかったことになる。これこそが塩野谷に対する真摯なる学問的批判である。

読者はここでも当惑するだろう。まさか塩野谷がそこまで理解力がない「ケインズ学者」であるとは!!

誠実なケインズは『貨幣論』の時点における「投機的動機に基づく流動性選好」の説明は若干の混乱があることを認めた。そのため、『一般理論』において自らその混乱を訂正しようとしている(第13章 利子率の一般理論第四節全体)。それが次の文章である。まず原文を挙げ、次に拙訳、そして最後に塩野谷の訳を提示し、三位一体的比較をしておく。塩野谷はケインズが何を言いたいのかわかも理解できていないのである。

#### 原文

Whilst liquidity-preference due to the speculative motive corresponds to what in my *Treatise on Money* I called 'the state of bearishness', it is by no means the same thing. For 'bearishness' is there defined as the functional relationship, not between the rate of interest (or price of debts) and the quantity of money, but between the price of assets and debts, taken together, and the quantity of money. This treatment, however, involved a confusion between results due to a change in the rate of interest and those due to a change in the schedule of the marginal efficiency of capital, which I hope I have here avoided (JMK.7, pp.173-4).

#### 拙訳

投機的動機に基づく流動性選好は、私が『貨幣論』の中で「株価下落に賭ける投機の状況」と呼んだものに対応しているが、それはけっして同じものでない。なぜなら、ここでは「株価下落に賭ける投機」は利子率(または債券の価格)と貨幣量との関数関係としてではなく、株という資産(assets)と債券(debts)とを一括した価格と貨幣量との間の関数関係として定義されたからである。しかし、このように扱ったために、金利が変化することによって生じる結果と資本の限界効率性が変化して生じる結果が混同されてしまった。そ



れを私はここでは取り除けたと思っている（流動性選好を利子率変化の効果に関して論じる場合、この章では、もっぱら債券価格変動との関係をもっぱら論じるというわけである―筆者の解題）

### 塩野谷訳

投機的動機に基づく流動性選好は、私が『貨幣論』の中で「弱気の状態」と呼んだものに相当するけれども、それはけっして同じではない。なぜなら、そこでは「弱気」は、利子率（または債権価格）と貨幣量との間の関数関係としてではなく、資産と債権を一括したものの価格と貨幣量の間の関数関係として定義されたからである。しかし、この取扱いは、利子率の変化による結果と資本の限界効率表の変化による結果との混同を含んでいた。それを私はここで取り除いたつもりである（一七一―二頁）

ケインズの原文を照らし合わせれば、拙訳と塩野谷訳ではいずれが正確な訳出になっているか読者は判断していただければよい。まず、塩野谷のような「弱気の状態」という投機家はこの世に存在しない。これは先物取引における平井の無知な解題を批判した箇所（拙稿（上）VI節）でも指摘したとおり、「信用売り」のことであり、株や債券が下落すると見て信用売りして後で安く買い戻して利益を得ようとする人々の手口のことである。株や債券が下がるという「強気」の判断で「信用売り」するのである。逆に塩野谷が誤訳している「強気筋」とは、株や債券が上昇するとみて信用買いし後で高く売って利益を得ようとする人々の手口のことである。

さらに塩野谷の致命的誤訳は続く。「資産と債権を一括したものの価格と貨幣量の間の」という訳に相当する原文は *but between the price of assets and debts, taken together, and the quantity of money.* である。

さて、塩野谷の訳のようになると「資産と債権」の「資産」と「債権」の区別は一体どうしてできるのか？ 筆者のように「株という資産と債券」と訳さないとケインズの本意をつかめない。親の子心知らずといったところか、

ケインズがわざわざ、その点を「混同」しないよう、その「混同」を「ここで取り除いたつもりである」はずなのに、塩野谷はそれが一体何のことかもサッパリ理解できず、それ以前の低次概念でも混同していたわけである。したがって、皮肉なことに、塩野谷はケインズの言う意味での「混同」から免れることができた。ケインズの「混同」の域にも達していないからである。

■「流動性選好」も説明できない「流動性」恐慌

先の第12章第六節の第三パラグラフの訳も意味が伝わりにくい内容になっていたが、塩野谷がケインズの流動性選好の意味を何も理解していないことが如実に示されるのは第四パラグラフである。ケインズにおける流動性選好と「貨幣保藏」（筆者なら「貨幣退蔵」と訳すが）の関係を何も理解していない。

塩野谷の訳

現代世界の経済生活を悩ませている確信の危機を救う唯一の急進的方法は、個人に対して、所得を消費すること、あやふやな根拠によりながらも、彼が行うことのできる最も有望な投資と思われる特定の資本資産の生産を注文することとの間の選択を許さないことだろう。彼がふだんと違って将来への危惧に襲われた場合には、狼狽のあまり消費を増やし、新投資を減らそうとすることがあろう。しかし、この事態は、個人が同じような危惧に襲われた場合に、彼がその所得を消費にも投資にも支出しないことが許されているさいに生じる悲惨で累積的で広範な影響をさけることになろう（一五九頁）

原文

The only radical cure for the crises of confidence which afflict the economic life of the modern world would be to allow the individual no choice between consuming his income and ordering the production

of the specific capital-asset which, even though it be on precarious evidence, impresses him as the most promising investment available to him. It might be that, at times when he was more than usually assailed by doubts concerning the future, he would turn in his perplexity towards more consumption and less new investment. But that would avoid the disastrous, cumulative and far-reaching repercussions of its being open to him, when thus assailed by doubts, to spend his income neither on the one nor on the other. (JMK.7, p.161)

拙訳

現代世界の経済生活を苦しめている信認危機を救う唯一の思い切った方法は、個人が所得を消費するのか、それとも、最も有望な投資と思われる、しかしそれがあやふやな根拠によるものにすぎない特定の資本証券に投資するのか、その選択を断ち切ることである。彼が通常よりも将来への不安に襲われた場合、狼狽のあまり消費を増やし、新投資を減らそうとすることもあるだろう。しかし、消費することの方がまだましであり、彼が不安に襲われ、所得を消費にも投資にも回すこともできない選択肢（すなわち貨幣保蔵のこと）だけしか残されていない場合に生じる悲惨で累積的な広範囲に及ぶ悪影響は避けられるであろう。

このパラグラフでケインズの主張したことは何か。経済において貨幣退蔵（塩野谷訳では「貨幣保蔵」）が起こると投資・消費が抑えられ経済が停滞する。だから投資・消費の促進が必要となる。それを行うのが国家であるというのである。それをケインズは「古い壺」に入った銀行券の話の比喩を使いながら力説したのである。

特に投資マインド（ケインズのいわゆる animal spirits）が冷え込むのをケインズは恐れている。それが第七節の話である。しかし塩野谷によってケインズの意図は封印されてしまった。資産の全存続期間にわたる予想収益を予

測する投資活動 (enterprise) のことをここでも「企業」と誤訳しているから、とんでもない訳になってしまう。それが次の文である。

したがって、もし血気が鈍り、自生的な樂觀が挫け、数学的期待値以外にわれわれの頼るべきものがなくなれば、企業は衰え、死滅するであろう。ただし、その場合、損失への恐怖は、先に利潤への希望がもっていた以上に合理的な基礎をもっているわけではない (一六〇頁)

ここは基本的に文は意味が通る。「企業」を「長期投資活動」に置き換えれば。

それに直統する訳文も同様に「企業」を「長期投資活動」に置き換えればケインズの意味は見事に伝わるのである。すなわち、「将来への希望に依存する企業は、社会全体に利益を与えるといって間違いない」(一六〇頁)と記述されている「企業」を「長期投資活動」とすればよい。この種の投資(投機投資とは正反対)が回復すれば消費も回復し景気も上昇するという単純なシナリオである。

だから英米の政権の経済政策に関する記述、すなわち、「労働党内閣やニュー・ディールに対する不安が企業を抑圧する場合」(二六〇頁、p.160)も「企業」を「長期投資活動」と上書きすればすむのである。こうしておけば、塩野谷訳のように、「企業」を「死滅」させることもないし、「抑圧」することもなくなる。

もし仮に塩野谷訳が正しいとして、「企業が衰え、死滅する」とすれば、「投機」も死んでしまう。なぜなら企業が「死滅」すれば投機の対象となる、企業が発行する株も債券も存在しなくなるからである。簡単に論理的に考えれば、ケインズの世界では「投機」と「企業」は併存する関係にあることは一目瞭然のことだろう。

■ケインズの言葉を借りて、本邦「ケインズ学者」に贈る警句

ケインズは自身の記述の混乱を自省し、それを改めることにやぶさかではなかった。そして『貨幣論』から『一般理論』における流動性選好概念の彫琢を重ねた。ケインズ学者は当然、その追体験的考察を果たすべきであった。その意味で、以下に掲げるケインズの警句は示唆的である。

将来に関してわれわれが無知であつてもその影響を實質上緩和できる重要な要因がいくつかある（JMK.7, p. 163）

塩野谷はシュンペーター研究の第一人者だそうである。一九八五年に日経図書文化賞特賞、一九八九年には日経図書文化賞、一九九一年は日本学士院賞、一九九二年には文化功労者となっている。さらには一橋大学学長も務めていた。さて今回指摘されたケインズ訳出に関する諸問題はそれらの選考の参考資料になったのであろうか？ サブプライムローン関連商品の格付け問題はケインズ学者にとっては他人事ではないのである。

一九九五年には塩野谷によるケインズの『一般理論』の廉価版が出された。それは一九八三年の翻訳、一九九〇年の第八刷りが元になっている。驚愕すべきことにその翻訳は全然改正されていない。そして「訳者あとがき」を読むとさらに、あ然とさせられる。塩野谷祐一は父親の九十九の旧訳を元にして訳出し、高橋泰藏教授と安井琢磨教授の校閲を受けたそうである。高橋は一橋大学、安井は東北大学の教授だった。ちなみに平井の師匠が安井である。こういう知的レベルの「ケインズ学者」が何十年にもわたり、『一般理論』を解題してきたことになる。現在もその問題点を是正する動きもない。

しかも塩野谷の自身の訳に対する自信ぶりも相当のものである。「古典としての『一般理論』における一つ一つの文章は、引用と参照に耐えるように原形をとどめながら、なお十分に読み易く、明快なものでなければならぬ」

(四二三頁)。読者がそれを、「十分に読み易く、明快なもの」であると感じたとすれば、その読者は文盲であるといえない。

### むすび

なぜケインズ・ハザードが蔓延しているのか？ いろいろな事情がある。まずケインズに関する権威の文献を読んだふりをしていること。それを読む能力が覚束ないことを自覚しているからであろう。もちろん片言隻句をもてあそぶことはできる。しかし断章取義が災いしている。ケインズ全集はおろか、モグリッジ、スキデルスキーの大部のケインズ伝の一部も全体も読んでいない。だからケインズの晩節の事情に不明となる。特に平井の場合、金融経済に暗いので、関連文献を手にしても意味が理解できず、そのためにケインズに関し驚くべき誤認を繰り返していた。

そのような誤認から免れる一つの有効な方法があったはずだ。平井が詳しいはずのケインズ・ロバートソン間の議論をたどることである。ところがその議論の白眉を平井は読み過ごしてしまった。それは戦後通貨構想をめぐる両者の議論である。これをたどればケインズの戦後通貨構想の変容がストレートに理解できるはずであるが、平井の場合、宝の山を目の前にしてもその輝きが目に止まらなかったのである。

そしてさらに震撼すべき事実が浮かび上がった。『一般理論』の翻訳(第二章、一三章)は誤訳(塩野谷訳)で塗り固められていたことである。およそ原意を解しない訳が世に広まり、多くの人がある迷訳に迷わされてしまった、混乱を極めるケインズ学の原点がここにある。

これでは、シネマのバイオ・ハザードではないが、学者の世界では、本者が地下に追いやられ、偽者が我が物顔

に大地を闊歩する。筆者のいわゆる、経済学版「グreshamの法則」である。その結果、『一般理論』の誤訳が正統なものとしてまかり通る。まさに『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』の倒錯した世界が繰り広げられるのである。そういえばケインズ・ロバートソン論争で注目されたロバートソンはルイス・キャロルの愛読者であった。筆者が今回、拙稿に付したタイトルは決して誇張ではないことを読者は得心されるだろう。

付録 京都大学経済学博士号審査の実態調査報告

### 京都大学における経済学博士誕生の顛末

ここでは岩本武和（平成一九年度現在、京都大学経済学部教授）の学位記論文の内実を紹介しておく。この論文は平成一一年三月二三日付けで、京都大学より「論経博第233号」として学位授与されている。学位論文題名は「ケインズと世界経済」。これは後に岩波書店から『ケインズと世界経済』として一九九九年に著書として世に出ている。

この論文の博士号審査に携わった京都大学の論文調査委員は本山美彦教授（主査）、小島専孝教授、根井雅弘助教授の三名である。その論文調査記録は京都大学図書館に収められている（学位請求論文NO.41 図書登録番号 BNC/※/176）

調査委員の記録によれば、「ケインズの生涯を通じての最大の理論的関心は国際金融」（同記録、一二八八頁）とのこと。そして岩本論文の意義はケインズ全集や英国公文書館（PRO）所蔵の資料公開を「契機に始まった戦間

期イギリス経済史研究の見直しが始まった後、この分野に関する最初のまとまった研究である」(二二八八頁) である。

もしこの二点に関する調査委員の評価が妥当しないとすれば岩本論文の意義はすべて失われる。そして調査委員の学識の内実も問われることになる。実際、調査委員の評価は妥当しない。なぜなら、「ケインズの生涯を通じての最大の理論的関心は国際金融」という、そのケインズが携わっていた国際金融問題(戦後処理問題)に関し岩本が無知であることを評定できなかったこと。次に、岩本は「この分野に関する最初のまとまった研究である」はずのモグリッジのケインズ伝(1992)を実際には読んでいないので、日本における「この分野に関する最初のまとまった研究」になるはずのないこと。

さらにいえば、その「まとまった研究」に欠かせないケインズ全集も読んでいない(もちろん読んだふりをする)。たとえば、岩本が主に典拠としているはずのケインズ全集二六巻の訳は該当箇所がちゃんぶんかんぶんなのであるが、岩本はその点について何も言及できない。要するに読んでも何がおかしいのか理解できないのである。

では第一の点をもう少し詳しく説明する。実は審査する側の人間もケインズのかかわった国際金融問題に関し何も知らない(ちなみに調査委員の一人の根井はケインズ研究で有名)。その根拠を二点にわたり、示しておく。

ひとつはケインズの清算同盟のことである。この案に関し、論文調査委員は、「外国為替取引を全て中央銀行に集中させた上での多角的決済である」(二二八八頁)と要約している。このような要約をすると大変なことになることを論文調査委員は自覚できる知力に欠けるようだ。

清算同盟案はナチスの為替清算協定を真似したものであるという、岩本の主張からすれば、それは双務協定のはずである。だから「多角的決済」になるはずがない。双務協定は二国間の収支を常に均衡させる方式であり、「多角的決済」は二国間収支均衡を求めない方式である。だからこそ清算同盟案のケインズは双務協定をめざしており、「多



角的決済」を求めるはずがないのである。ケインズは清算同盟を通じ双務協定を複数張り巡らそうとしたのである。これはナチスが実践してきたことである。

このような清算同盟方式だからこそ、ケインズは「資本移動の自由は厳しく制限される」（二二八頁）べきであると考えた。清算同盟案、資本移動規制案いずれも英国を為替管理で防衛しようとする試みなのである。

ところが岩本も審査委員もいずれもこれを逆立ちして理解する。すなわち、清算同盟案は「国際協調として語られる世界的規模でのケインズ政策」であり、「国際資本移動の規制」は「二国経済を世界経済からの遮断・隔離」であり、清算同盟案と国際資本移動の規制は「一見相反する主張」（二二八九頁）であると解釈してしまった。前者が開放経済であり、後者が隔離政策であると理解してしまった。筆者はこういう理解には溜息をつくしかない。

これではIMF協定作成をめぐる英米金融交渉の錯綜した事情を理解できる知力を京都大学の博士論文調査委員の人間に期待するわけにいかない。いわんやIMF協定の核をなす第八条の第2項と第4項の関係も理解できるはずがない（この二つの項の関連はV節（iii）参照）。そしてこの関係の解釈をめぐるケインズの地位が失墜する経緯も理解できない。実際、岩本はケインズがどうしてこの協定の解釈を誤ったのか、そして後に権威を失墜してしまう経緯を何も理解できないのである。ケインズが解釈を誤ったことも知らない。

ではケインズに関する国際金融問題への岩本の無知ぶりの二つ目の事例を紹介する。この協定解釈をめぐるケインズ・ロバートソン論争の問題の所在が五里霧中であること。それも当然である。この論争の核心を簡明に解題したIMF元法制局長ゴールドの小冊子も読んだふりをしてしまい、とんでもない理解をさらけ出したこと（米倉二〇〇五六七～八六頁）。日本の学者はゴールドの小冊子さえも読まずにブレトンウッズ協議におけるケインズの役割を賢しらに語ってきたわけである。ちなみにゴールドの小冊子が出たのは一九八一年のこと。岩本の本が出るおよそ二十年前の話である。ゴールドはケインズ全集を読んでケインズの誤解釈に驚いた。これとは対照的に全く驚

かないのが日本のケインズ学者だった。改めて強調していく。ゴールドはIMF法規解釈の世界の第一人者である。ここでは同協定第八条の第2項と第4項に関する岩本のデタラメな解説を鵜呑みにしてそれを要約してしまった論文調査委員の「要旨」を紹介しておく。非常に面白いのでその箇所を全文、引いておく。

第8条第2項が規定する「市場交換性」を第4項が規定する「公的交換性」に従属させて解釈しようとするケインズは敗北し、その後外国為替市場が順調に発展することによって第4項が死文化化している現状を鑑みても、ロバートソンの見解の正しさを物語っている(一二八頁)

本稿の本文で示したとおり、ロバートソンがケインズに論争で勝ったのは岩本の解題とはまったく関係ない次元の話である。右の引用部分はゴールドの叙述を一知半解に切り貼りの要約したものである。しかも岩本が参照しているゴールドは一九八一年以前のそれにすぎない。だから実際の一九八一年のゴールドの主張とは似て非なる内容に終わる。さらに言おう。第2項は別に「市場交換性」にかぎらない。「公的交換性」も入る。民間、公的通貨当局を問わず、経常取引における通貨交換性を回復する。それが第八条第2項の根本である。第4項は最初から英国に関する特殊事情によるものであり、だからこそ、戦後経済の回復につれて「死文化」するのである。

第4項が停止されれば第2項は自動的に停止されると考えたのがケインズであり、それが間違っていると論じたのがロバートソンであり、ケインズはこの主張を渋々認めたのである。だからこそ絶賛していたはずのIMF協定をこきおろし条文改正まで画策したのである。そういう経緯を「ブラックコメディ」として紹介したのがモグリツジである。岩本はこの「ブラックコメディ」を理解できない「ブラックコメディ」を演じてくれる。もちろん京都大学及び日本のケインズ学者の多くが日本版「ブラックコメディ」の舞台上に登場してくれる。

このように世界のケインズ研究の権威も読まずにケインズを語る。それが日本のケインズ学者の大半なのである。

これは平井の場合もおなじである。要するに日本のケインズ学者は世界のケインズ研究の動向も知らずにケインズを語っているわけである。このグローバル化の時代においてである。

岩本の学位論文、そしてそれを審査した論文調査委員の知的水準の内実。それをたたけば埃は舞い上がる。その埃でケインズ学者の世界は真っ暗になってしまう。たとえば、隕石の衝突でてんやわんやする恐竜の運命のようなものである。葉隠れの里の筆者故、これ以上の論評は控えておく。

興味が尽きない点は、岩本の学位論文について、京都大学経済学研究科では一体、どのような議論が交わされたかである。とまれ、「平成11年2月10日、論文内容とそれに関連した諮問を行った結果、合格と認めた」（二二八九頁）ために岩本博士がめでたく誕生したのである。

#### 参考文献

- S. Howson and Moggridge (ed.) ① *The Wartime Diaries of Lionel Robbins and James Meade, 1943-45*, London, 1990  
 —— ②, *The Collected Papers of James Meade*, Vol.IV: *The Cabinet Office Diary 1944-46*, London, 1990  
 J.M. Keynes, *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Managing Editors, Sir Austin Robinson and Donald Moggridge, London: Macmillan.  
 IV *A Tract on Monetary Reform*, 1971  
 VI *A Treatise on Money, I The Applied Theory of Money*, 1971  
 VII *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1973  
 IX *Essays in Persuasion*, 1972  
 XII *Economic Articles and Correspondence: Investment and Editorial*, 1983  
 XIII *The General Theory and After: Part I. Preparations*, 1973  
 XXIII *Activities 1940-3: External War Finance*, 1978  
 XXIV *Activities 1944-6: The Transition to Peace*, 1979

- XXV *Activities 1940-4: Shaping the Post-War World - The Clearing Union*, 1980
- XXVI *Activities 1944-6: Shaping the Post-War World - Bretton Woods and Reparations*, 1980
- XXVII *Activities 1944-6: Shaping the Post-War World - Employment and Commodities*, 1980
- XXVIII *Social, Political and Literary Writings*, 1982
- 牧野裕『ブレトンウッズ体制』上川孝夫・矢後和彦編『新・国際金融テキスト2 国際金融史』有斐閣、二〇〇七年、第四章、所収
- D.E. Moggridge, *Maynard Keynes - An economist's biography*, London & New York, 1992
- 西部邁『ケインズ』イブシロン出版企画、二〇〇五年（復刻版）
- L. Robbins, *Autobiography of an Economist*, London, 1971
- F.E. Perry, *The Elements of Banking* (2nd ed.) Methuen, London, 1977
- バーナード・シヨー『聖女ジャンヌ・ダーク』福田恆存・松原正訳、主婦の友社、ノーベル文学全集20、一九七二年
- クラウディオ・サルターニ『ケインズとマルクス』in G.C. Harcourt and R.A. Riach (ed.), *A Second Edition of the General Theory* Vol.1&2, Routledge 1997, 宇沢弘文（序）『小山庄三（訳）』『一般理論—第二版』多賀書店、2005年、36章、所収
- R. Skidelsky, *John Maynard Keynes - The Economist as Saviour 1920-1937*, Vol.II, London, 1992
- *John Maynard Keynes - Fighting for Britain 1937-1946*, Vol.III, Macmillan, London, 2000
- 米倉茂『ケインズ・ロバートソン論争の現代的波紋—「三匹の犬」のどちらが首尾よく「骨」をくわえ、どちらが尻尾を捲いたのか?』『佐賀大学経済論集』第三八巻第二号、二〇〇五年七月、
- 『落日の肖像—ケインズ』イブシロン出版企画、二〇〇六年
- 『日本のケインズ学への晩鐘—東京大学・吉川洋による拙著、『落日の肖像—ケインズ』の書評への覚書』『佐賀大学経済論集』第三九巻第六号、二〇〇七年三月